

神戸市須磨（青年層）方言のアクセント

橋尾直和

1. はじめに

従来、兵庫方言のアクセント研究は、接境方言（鳥取・岡山・京都・大阪との）に重点が置かれ、都市部の方言のアクセント研究は盛んではなかった。そこで、これまで十分に研究されていない、都市部の神戸市須磨（青年層）方言のアクセントの記述を試み、その実態と特徴を明らかにしたい。

なお、資料はすべて筆者（1960年神戸市須磨区生まれ。19歳まではその土地で暮らした）の内省によるものである。

本論で用いた記号については、●は自立語の高い拍の一拍、○は低い拍の一拍、▼は付属語（助詞）の高い拍の一拍、▽は付属語の低い拍の一拍を示す。○は一拍の中で下降のある拍内に“さがりめ”のある拍を示す。音韻論的解釈でいう“さがりめ”は／ʌ／で表す。[]は音声を示す。音声はIPAで表し、高い拍には上側に一を施す。拍内に“さがりめ”のある拍は、上側に\を施す。

2. 神戸市須磨（青年層）方言のアクセントの実態

2.1 一拍名詞のアクセント

神戸市須磨（青年層）方言では、共通語で一拍に発音する名詞は、[tʃi:·tʃi:ga deru]（血・血が出る）、[ha:·ha:ga otʃiru]（葉・葉が落ちる）[e:·e:ga aru]（絵・絵がある）などのように、第一拍の母音を長くのばして二拍または一拍半ほどに発音する。付属語がついた時も、第二拍の母音は長く発音する。

一拍名詞のアクセント節は、次の三種の型を示す。

① [●●・●●▼]

〈柄〉、〈名〉、〈荷〉などは、[e:·e:ga oreru]（柄・柄が折れる）、[na:·na:ga ʃireru]（名・名が知れる）、[ni:·ni:ga omoi]（荷・荷が重い）のように高平型に発音する。付属語は〈が〉が高く続く。〈は・を〉もこれと同じ現象を起こす。なお、〈も〉はこれらとは異なり低く続く。以下、付属語は〈が〉で代表させる。

② [●○・●○▽]

〈毛〉、〈葉〉、などは、[ke:·ke:ga haeru]（毛・毛が生える）、[ha:·ha:ga otʃiru]（葉・葉が落ちる）のように頭高型に発音する。付属語は低く続く。

③ [○●・○○▼]

〈世〉、〈矢〉、〈絵〉などは、[jō:·jo:gā kawaru] (世・世が変わる)、[jā:·ja:gā oreru] (矢・矢が折れる)、[ē:·e:gā aru] (絵・絵がある)のように尾高上型に発音する。付属語は高く続く。付属語がついたときに、アクセントの山を一拍後に移動させるといった現象は、京都・大阪方言と同様である。

たとえば、①の〈柄〉と③の〈絵〉とを比べてみると、[konoe:] (この柄)、[konoe:] (この絵)のように発音され、第一拍の「低」は音韻的に有意味となる。つまり、高く始まるか(高起式)、低く始まるか(低起式)が音韻論的解釈の鍵となる。

2.2 二拍名詞のアクセント

二拍名詞のアクセント節は、次の五種の型を示す。

① [●●・●●▼]

〈鼻〉、〈寺〉、などは、[hanā·hanagā takai] (鼻・鼻が高い)、[terā·teragā ē] (寺・寺が良い)のように高平型に発音する。付属語は高く続く。

② [○●・○●▼]

〈北〉は [k̄ītā·k̄ītagā samui] (北・北が寒い)のように平板型に発音する。付属語は高く続く。

③ [●○・●○▼]

〈石〉、〈花〉などは、[īf̄ī·īf̄igā aru] (石・石がある) [hanā·hanagā saku] (花・花が咲く)のように頭高型に発音する。付属語は低く続く。

④ [○●・○●▼]

〈斧〉、〈息〉、〈雨〉などは、[onō·onogā aru] (斧・斧がある) [ikī·ikigā kireru] (息・息が切れる)、[amē·amegā huru] (雨・雨が降る)のように中高型に発音する。付属語は低く続く。

京都・大阪・神戸方言の高年層に見られる、[amē·amegā] (雨・雨が)のように第二拍を下降調に発音し、付属語がついた場合に第二拍の拍内の下降が消えて高く発音される現象は観察されない。

⑤ [○●・○○▼]

〈縁〉、〈缶〉、〈満〉などは、[eN̄·enggā aru] (縁・縁がある)、[kaN̄·kangā ē] (缶、缶が良い)、[maN̄·mangā warui] (満・満が悪い)のように尾高上型に発音する。付属語は高く続く。

①の [●●・●●▼] (鼻・鼻が) と③の [●○・●○▼] (花・花が) とを比べて

みると、③の第一拍の後の“さがりめ”が音韻的に有意味であることが分かる。つまり、“さがりめ”があるかないか、あるとすればどの位置にあるかが音韻論的解釈の鍵となる。

音韻論的解釈のポイントを整理すれば、以下の2項目となる。

(1)高起式か低起式か。

(2)“さがりめ”の有無とその位置。

たとえば、②の場合①と同じく“さがりめ”は存在しない。第一拍が低く発音されるのは、母音の無声化という条件の下で引き起こされる現象である。これらを、音韻論的には同一と見なし、/○○/と解釈する。

さらに、二拍名詞の④と一拍名詞の③、二拍名詞の⑤とを比べてみると、単独での発音は[○●]で共通しているが、付属語が付いた場合、二拍名詞の④の[○●▽]と一拍名詞の③や二拍名詞の⑤の[○○▽]のように、音相が異なっている。ところが、一拍名詞の③の〈世〉[jo:]、〈矢〉[ja:]などは第二拍が長音、二拍名詞の⑤の〈縁〉[eN̄]、〈缶〉[kaN̄]などは第二拍が撥音である。つまり、付属語が付いた場合、第二拍が特殊拍であるという条件の下でアクセントの山が一拍後に移動する現象を引き起こしたと判断される。これらを、音韻論的には同一と見なし、/〇〇〇/と解釈する。

したがって、一拍名詞の①を/○○/、②を/〇〇/、③を/〇〇〇/と解釈し、二拍名詞の①を/○○/、②を/○○/、③を/〇〇/、④を/〇〇〇/、⑤を/〇〇〇/と解釈する。

2.3 三拍名詞のアクセント

三拍名詞のアクセント節は、次の五種の型を示す。

① [●●●・●●●▽]

〈筏〉、〈間〉、〈黄金〉、〈拳〉、〈簾〉、〈背中〉などは、[ikada・ikadaga ukabu] (筏・筏が浮かぶ)、[aida・aidaga umaru]、(間・間が埋まる)、[kogane・koganega aru] (黄金・黄金がある)、[kobuji・kobufiga katai] (拳・拳が堅い)、[sudare・sudarega aru] (簾・簾がある)、[senaka・senakaga kajui] (背中・背中が痒い)、のように高平型に発音し、付属語は高く続く。

② [●○○・●○○▽]

〈えくぼ〉、〈鮑〉、〈嵐〉、〈朝日〉、〈病〉などは、[ekubo・ekuboga dekuru] (えくぼ・えくぼができる)、[awabi・awabiga ei] (鮑・鮑が良い)、[araji・arasjifiga huku]

(嵐・嵐が吹く) [āsacī · āsaçiga deru] (朝日・朝日が出る)、[jamī · jamaiga aru] (病・病がある) のように頭高型に発音し、付属語は低く続く。

③ [●●○・●●○▽]

〈籠〉、〈二つ〉、〈恨み〉、〈心〉などは、[humoto · humotoga abunai] (籠・籠が危ない)、[hutatsū · hutatsūga e:] (二つ・二つが良い)、[urami · uramiga aru] (恨み・恨みがある)、[kokoro · kokoroga daidzi] (心・心が大事)、のように頭二高型に発音し、付属語は低く続く。

④ [○○●・○○○▽]

〈額〉、〈夕べ〉、〈兎〉、などは、[çitaī · çitaiga akai] (額・額が赤い)、[ju:bē · ju:bega e:] (夕べ・夕べが良い)、[usagī · usagiga ōru] (兎・兎がいる) のように尾高上型に発音し、付属語は高く続く。[çitaī] (額) の場合、[i] のみが高と発音され、連母音としてのアクセントは持たないのが特徴である。

⑤ [○●○・○●○▽]

〈小豆〉、〈頭〉、〈櫛〉、〈高さ〉、〈後ろ〉などは、[adzūkī · adzūkiga ūmai] (小豆・小豆がうまい)、[atamā · atamaga e:] (頭・頭が良い)、[tasūkī · tasūkiga aru] (櫛・櫛がある)、[takasā · takasaga aru] (高さ・高さがある)、[ujirō · ujiroga kurai] (後ろ・後ろが暗い) のように中高型に発音し、付属語は低く続く。

①を/○○○/、②を/○^〴○○/、③を/○○^〴○/、④を/^〴○○○○/、⑤を/^〴○○^〴○/と解釈する。

2.4 四拍名詞のアクセント

四拍名詞のアクセント節は、次の七種の型を示す。

① [●●●●・●●●●▽]

〈妹〉、〈獣〉などは、[imotō · imotoga ōru] (妹・妹がいる)、[kemonō · kemonoga kowai] (獣・獣が怖い) のように高平型に発音し、付属語は高く続く。

② [●○○○・●○○○▽]

〈挨拶〉、〈朝顔〉などは、[aisatsū · aisatsūga ūmai] (挨拶・挨拶がうまい)、[āsagaō · āsagaoga saku] (朝顔・朝顔が咲く) のように頭高型に発音し、付属語は低く続く。

③ [●●○○・●●○○▽]

〈果物〉、〈粉雪〉などは、[kudamonō · kudamonoga aru] (果物・果物がある)、[konajukī · konajukiga huru] (粉雪・粉雪が降る) のように頭二高型に発音し、付属語は低く続く。

④ [●●●○・●●●○▽]

〈青空〉、〈唐傘〉などは、[a^ozora・a^ozoraga mieru] (青空・青空が見える)、[karakasa・karakasaga aru] (唐傘・唐傘がある) のように頭高三型に発音し、付属語は低く続く。

⑤ [○○○●・○○○○▽]

〈一杯〉、〈近鉄〉などは、[ippai・ippaiga e:] (一杯・一杯が良い) [kintetsū・kintetsūga ka^stū] (近鉄・近鉄が勝つ) のように尾高上型に発音し、付属語は高く続く。

⑥ [○●○○・○●○○▽]

〈色紙〉、〈鶯〉などは、[irogami・irogamiga aru] (色紙・色紙がある)、[uguisū・uguisūga naku] (鶯・鶯が鳴く) のように中二高型に発音し、付属語は低く続く。

⑦ [○○●○・○○●○▽]

〈カマキリ〉、〈竹の子〉などは、[kamakiri・kamakiriga tobu] (カマキリ・カマキリが飛ぶ)、[takenoko・takenokoga haeru] (竹の子・竹の子が生える) のように中三高型に発音し、付属語は低く続く。

①を/○○○○/、②を/○^o○○○/、③を/○○^o○○/、④を/○○○^o/、⑤を/^o○○○○/、⑥を/^o○○^o○○/、⑦を/^o○○○^o/と解釈する。

2.5 二拍動詞のアクセント

二拍動詞のアクセント節は、次の三種の型を示す。

① [●●]

五段動詞の〈行く〉、〈産む〉、などは、[iku]、[umu] のように終止形は高平型に発音する。過去形は [itta] (行った) の頭二高型および [unda] (産んだ) のように頭高型に発音する。

一段動詞の〈着る〉、サ変動詞〈為る〉などは、[kiru]、[sūru] のように終止形は高平型に発音する。過去形は [kita] (着た)、[jita] (為た) のように頭高型に発音する。

② [●○]

〈居る〉は、[oru] のように終止形は頭高型に発音する。過去形は [otta] (居た) のように頭二高型に発音する。この語のみ終止形を頭高型に発音する。

③ [○●]

五段動詞の〈降る〉、〈蒔く〉などは、[huru]、[maku] のように終止形は尾高型、過去形は [hutta] (降る)、[maita] (蒔いた) のように第三拍だけを高く発音する。

一段動詞の〈見る〉、カ変動詞の〈来る〉などは、[miru]、[kuru] のように終止形は尾高型に発音する。過去形は [mita] (見た)、[kita] (来た) のように頭高型に発音する。

①を／○○／、②を／○㇇○／、③を／㇇○○／と解釈する。

2.6 三拍動詞のアクセント

三拍動詞のアクセント説は、次の二種の型を示す。

① [●●●]

五段動詞の〈上がる〉、〈余る〉、一段動詞〈明ける〉、〈借りる〉などは、[agaru]、[amaru] [akeru]、[kariru] のように終止形は高平型に発音する。過去形は [agatta] (上がった) [amatta] (余った)、[aketa] (明けた)、[karita] (借りた) のように頭高型に発音する。

五段動詞の〈浮かぶ〉〈動く〉などは、[ukabu] [ugoku] のように終止形は高平型に発音する。過去形は [ukanda] (浮かんだ)、[ugoita] (動いた) のように頭二高型に発音する。

② [○○●]

一段動詞の〈起きる〉、〈建てる〉などに、[okiru]、[tateru] のように終止形は尾高型に発音する。過去形は [okita] (起きた)、[tateta] (建てた) のように中高型に発音する。

五段動詞の〈歩く〉、〈隠す〉などは、[aruku] [kakusu] のように終止形は尾高型に発音する。過去形は [aruita] (歩いた)、[kakujita] (隠した) のように中高型に発音する。

五段動詞の〈入る〉、〈参る〉などは、[hairu]、[mairu] のように終止形は尾高型に発音する。過去形は [haitta] (入った)、[maitta] (参った) のように中二高型に発音する。

①を／○○○／、②を／㇇○○○／と解釈する。

2.7 四拍動詞のアクセント

四拍動詞のアクセント節は、次の二種の型を示す。

① [●●●●]

五段動詞の〈疑う〉、〈表す〉などは [utagau]、[arawasū] のように終止形は高平型に発音する。過去形は [utagota] (疑った) [arawajita] (表した) のように第三拍

まで高く発音する。

一段動詞の〈与える〉、〈集める〉などは、 $[\overline{\text{ataeru}}]$ 、 $[\overline{\text{atsūmeru}}]$ のように終止形は高平型に発音する。過去形は $[\overline{\text{ataeta}}]$ (与えた) $[\overline{\text{atsumeta}}]$ (集めた) のように第二拍まで高く発音する。

② [○○○●]

一段動詞の〈隠れる〉は、 $[\overline{\text{kakureru}}]$ のように終止形は尾高型に発音する。過去形は $[\overline{\text{kakureta}}]$ (隠れた) のように第二拍のみ高く発音する。

①を /○○○○/、②を /[∩]○○○○/ と解釈する。

2.8 二拍形容詞のアクセント

二拍形容詞のアクセント節の型は、[○●] の一種のみである。

〈良い〉、〈無い〉は、 $[\text{e:}]$ 、 $[\text{nai}]$ のように終止形は尾高型に発音する。「～なる」の形は $[\overline{\text{jo:narū}}]$ (良くなる)、 $[\overline{\text{no:narū}}]$ (無くなる) のように高平型に発音する。

これを /[∩]○○/ と解釈する。

2.9 三拍形容詞のアクセント

三拍形容詞のアクセント節の型も、[●○○] の一種のみである。

〈赤い〉、〈熱い〉などは、 $[\overline{\text{akai}}]$ 、 $[\overline{\text{atsūi}}]$ のように終止形は頭高型に発音する。「～なる」の形は $[\overline{\text{akonaru}}]$ (赤くなる)、 $[\overline{\text{atsūnaru}}]$ (熱くなる) のように最後の拍のみ高く発音する。

これを /○[∩]○○/ と解釈する。

2.10 四拍形容詞のアクセント

四拍形容詞のアクセント節は、次の二種の型を示す。

① [●●○○]

〈悲しい〉、〈詳しい〉などは、 $[\overline{\text{kanaji:}}]$ 、 $[\overline{\text{kuwaji:}}]$ のように終止形は頭二高型に発音する。「～なる」の形は $[\overline{\text{kanajinaru}}]$ (悲しくなる)、 $[\overline{\text{kuwajinaru}}]$ (詳しくなる) のように高平型に発音する。

② [○○●○]

〈おいしい〉は、 $[\text{oifi:}]$ のように終止形は中三高型に発音する。「～なる」の形は $[\overline{\text{oijinaru}}]$ (おいしくなる) のように最後の拍のみ高く発音する。

①を /○○[∩]○○/、②を /[∩]○○○[∩]/ と解釈する。

3. アクセント体系

以上まとめて神戸市須磨（青年層）方言のアクセント体系を示せば、次のページの通りである。

4. アクセントの型の対応

ここで、東京・京都・神戸方言の老年層のアクセントと神戸市須磨（青年層）方言との、拍・二拍名詞のアクセントの対応を示せば、次の通りである。

表1 東京・京都・神戸(老年層)方言と神戸市須磨(青年層)方言の一拍名詞のアクセント

類	東京	京都	神戸	神戸市須磨	所 属 語
1類	○・○▼ ●・●▼	●●・●●▼ ○○・○○▼	●●・●●▼ ○○・○○▼	●●・●●▼ ○○・○○▼	柄・蚊・血・戸・帆・実 世
2類	○・○▼ ○・○▼ ○・○▼ ○・○▼ ○・○▼	●○・●○▼ ●○・●○▼ ●○・●○▼ ●●・●●▼ ●○・●○▼	●○・●○▼ ●○・●○▼ ●○・●○▼ ●○・●○▼ ●○・●○▼	●●・●●▼ ●○・●○▼ ●●・●●▼ ●●・●●▼ ●○・●○▼	名 葉 日 藻 矢
3類	●・●▼ ●・●▼	○○・○○▼ ●●・●●▼	○○・○○▼ ○○・○○▼	○○・○○▼ ●●・●●▼	絵・木・手・火・目・輪 穂

表2 東京・京都・神戸(老年層)方言と神戸市須磨(青年層)方言の二拍名詞アクセント

類	東京	京都	神戸	神戸市須磨	所 属 語
1類	○●・○●▼	●●・●●▼	●●・●●▼	●●・●●▼	飴・牛・鳥・庭・鼻・水
2類	○●・○●▼	●○・●○▼	●○・●○▼	●○・●○▼	石・音・川・夏・橋・雪
3類	○●・○●▼	●○・●○▼	●○・●○▼	●○・●○▼	足・犬・月・花・豆・山
4類	●○・●○▼	○○・○○▼	○○・○○▼	○○・○○▼	糸・息・海・笠・箸・松
5類	●○・●○▼	○○・○○▼	○○・○○▼	○○・○○▼	秋・雨・猿・春・婿・窓

以上の対応からその特徴を述べると、次の通りである。

- (1)一拍名詞の2類の〈名〉と〈日〉は、神戸市須磨（青年層）方言の高平型に対して、東京方言の尾高型と京都・神戸（老年層）方言の頭高型が対応している。
- (2)一拍名詞の2類の〈藻〉は、神戸市須磨（青年層）方言の高平型に対して、東京方言の尾高型と京都方言の高平型、神戸市（老年層）方言の頭高型が対応している。
- (3)一拍名詞の3類〈穂〉は、神戸市須磨（青年層）方言の高平型に対して、東京方言の尾高型と京都方言の高平型、神戸市（老年層）方言の尾高型が対応している。

表3 神戸市須磨(青年層)方言のアクセント体系

拍数	型	アクセント語(節)例
一拍語		(注)
二拍語	●●・●●▽ /00/	飴・牛・鼻・水<1類>、寺<2類>、倉<3類>、(柄・蚊・子・血<1類>、名・日・藻<2類>、葉・荷・野・穂<3類>)、 (行く・産む・着る・為る) 北<2類>
	●○・●○▽ /010/	石・音・橋・村<2類>、犬・草・花・山<3類>、(毛<1類>、葉<2類>)、(居る)
	○○・○●▽ /1001/	斧・瓶・雲<3類>、息・海・箸<4類>、雨・猿・窓<5類>、 (降る・乗る・見る) (良い・無い)
	○○・○○▽	(世<1類>)、矢<2類>、絵・尾・木・酢<3類>)、縁・恩・缶・満
三拍語	●●●・●●●▽ /000/	後・田舎・着物・仔牛<1類>、間・桜・翼・扉<2類>、黄金・小妻・婢<3類>、善・曆・仏<4類>、簾<5類>、背中<6類>、 (当たる・帰る・明ける・腫れる・進む・動く・頼む)
	●○○・●○○▽ /0100/	えくぼ<2類>、鮑・栄螺・力・二十歳<3類>)、嵐・五つ・紅葉・藤<4類>、朝日・油・命・ざくろ<5類>、病<7類>、 (赤い・厚い・白い・高い)
	●●○・●●○▽ /0010/	麓・南<1類>、二つ・二人<2類>、恨み・女・面・東<4類>、 心<5類>
	○○●・○○○▽ /1000/	額・羊・昔<1類>、タベ<2類>、兎・狐・雀・裸<6類>、 (植える・起きる・晴れる・遊ぶ・隠す・入る・作る)
四拍語	○○○・○○○▽ /10000/	小豆・釣瓶・とかげ・緑<2類>、頭・鏡・刀・畑<4類>、 褥・柱<5類>、高さ・狸<6類>、後ろ・蚕・鯨・葉<7類>
	●●●●・●●●●▽ /0000/	妹・敢闘・獣・欠航・散髪・丘陵・鏡台・倒産・洗濯・横綱 (疑う・悲しむ・表す・喜ぶ・与える・始める・集める)
	●○○○・●○○○▽ /001000/	挨拶・朝顔・狼・関東・官庁・蝙蝠・先生・たんぽぽ・父さん・ 阪神・犯人・富士山・羊かん
	●●○○・●●○○▽ /00100/	果物・結構・粉雪・花嫁・山々 (悲しい・尊い・空しい・親しい・涼しい・正しい・等しい)
	●●●○・●●●○▽ /00010/	青空・篝火・唐傘・花びら・花婿・止まり木・半年・万歳
	○○○●・○○○○▽ /100000/	一杯・近鉄・拳骨・高校・失敗・新宿・トンカツ・長靴 (隠れる)
四拍語	○○○○・○○○○▽ /100100/	色紙・鶯・兄弟・孝行・今晚・将来・食べ物・中指・湖・紫
	○○●○・○○●○▽ /100010/	インチキ・カマキリ・缶切り・竹のこ・手袋・毎日・松茸 (おいしい)

(注)一拍名詞「柄(1類)、毛(1類)、手(3類)」は、母音を長く引いて、

[eː・eːgā]	(柄・柄が)	●●・●●▽
[keː・keːgā]	(毛・毛が)	●○・●○▽
[teː・teːgā]	(手・手が)	○○・○○▽

のように二拍または一拍半ほどに発音され、すべての一拍語はこの三つの型のどれかに入る。体系的にはこれを二拍語と解釈し、二拍語の中で扱う。

なお、動詞・形容詞における類別の表示は省略した。

(4)二拍名詞の4類は、神戸市須磨（青年層）方言の尾高下型に対して、東京方言の頭高型と京都・神戸（老年層）方言の尾高上型（低平）が対応している。

(5)二拍名詞の5類は、神戸市須磨（青年層）方言の単独の第二拍を高く発音する尾高下型に対して、東京方言の頭高型と京都・神戸（老年層）方言の単独の第二拍を下降調に発音する尾高下型が対応する。

なお、京都・神戸（老年層）方言の4類の尾高上型（低平）に相当するのは、神戸市須磨（青年層）方言では一拍名詞の3類である。

5. アクセントの特徴

5.1 類の統合

(1)名詞アクセントについて、神戸市須磨（青年層）方言は、京都方言に代表されるような1/2・3/4/5という型の対立ではなく、東京方言に代表される1/2・3/4・5という型の対立である。このように、2類と3類、4類と5類とがそれぞれ統合し、4類と5類とが対立しないことが特徴である。

(2)動詞アクセントについて、神戸市須磨（青年層）方言は、二拍語では、東京・京都・神戸（老年層）方言と同じく類の統合はない。三拍語では、東京方言が1類と2類とが対立しているのに対し、京都・神戸（老年層）方言と同じく1類と2類の五段動詞とが統合し、2類の一段動詞と対立している。四拍語では、東京方言が1類と2類とが対立しているのに対し、京都・神戸（老年層）方言と同じく1類と2類の五段動詞とが統合し、2類の一段動詞と対立している。

(3)形容詞アクセントについて、神戸市須磨（青年層）方言は、二拍語では、東京・京都・神戸（老年層）方言と同じく、型は一種のみである。三拍語では、東京方言とは異なり、1類と2類とが統合している。これは、京都・神戸（老年層）方言と共通している。四拍語では、京都・神戸（老年層）方言と同く1類と2類とが統合している。

5.2 型の音相

(1)名詞アクセントについて、神戸市須磨（青年層）方言では、尾高上型 [○●・○○▼] は一拍名詞の3類と二拍名詞の「緑・恩・缶・険・根・芯・千・痰・判・糞・満」などがこの型に所属する。これらは、第二拍の特殊拍にアクセントの山がくる語において、付属語がついたとき、その山を一拍後へ移動させた相と判断される。

また、神戸市須磨（青年層）方言は、京都・神戸（老年層）方言に見られる [○●] を持たない。[○●] となって現れる。三拍の [○○●] も持たず、[○○●]

となって現れる。

(2)動詞アクセントについて、神戸市須磨（青年層）方言は、二拍語は、東京方言に見られる [○●] を持たない。三拍語は、東京方言に見られる [○●●] [○●○] を持たない。四拍語は、東京方言に見られる [○●●●]、[○●●○] を持たない。京都・神戸（老年層）方言と同じく [○○○●] を持つ。

(3)形容詞アクセントについて、神戸市須磨（青年層）方言は、二拍語は、東京方言に見られる [●○] ではなく、京都・神戸（老年層）方言と同じ [○●] である。三拍語は、京都・神戸（老年層）方言と同じ [●○○] である。[○●●]、[○●○]、[○○●] などは持たない。四拍語は、京都・神戸（老年層）方言と同じ [●○○○]、[○○●○] である。[○●●●]、[○●●○]、[○○○●] などは持たない。

6. おわりに

はじめに記したように、これまで、神戸市方言は老年層のアクセントの記述が多かったために、青年層のアクセントの実態が明らかではなかった。特に、神戸市須磨方言の青年層のアクセントの詳しい報告は皆無であった。ここで考察したように、筆者の内省による資料と他方言との比較によって、類の統合・型の音相の違いが明らかになった。今後の課題としては、神戸市方言のアクセントの地域差・年層差の研究が考えられる。

一・二拍名詞のアクセント語（節）例

(1)高平型 [●●・●●▼] /○○/

柄 蚊 子 血 戸 帆 実 身 世 〈1類〉、名 日 藻 〈2類〉、葉 荷 野 種 〈3類〉、飴 蟻 烏 賊 牛 梅 顔 柿 釘 口 首 滝 竹 塵 爪 虎 鼻 水 〈1類〉……、
寺 〈2類〉 倉 〈3類〉

(2)平板型 [○●・○●▼] /○○/

北 〈2類〉

(3)頭高型 [●○・●○▼] /○^〇○/

毛 〈1類〉、葉 〈2類〉、石 岩 歌 音 紙 川 旅 梨 夏 橋 旗 肘 冬 町 胸 村 雪 〈2類〉、足 網 泡 家 池 犬 色 腕 馬 裏 鬼 鍵 髪 神 岸 草 櫛 靴 栗 琴 竿 坂 塩 炭 月 花 骨 山 綿 〈3類〉……

(4)尾高下型 [○●・○●▼] /^〇○○/

斧 瓶 雲〈3類〉、息 糸 稲 今 白 海 瓜 笠 槽 数 肩 鎌 絹 錐
屑 空 種 箸 針 松 麦〈4類〉、秋 汗 雨 鮎 桶 蔭 蜘蛛 声 猿
露 鶴 春 鮎 窓 婿 夜〈5類〉

(5)尾高上型(低平) [○●・○○▼] / 〇〇〇 /

絵 尾 木 酢 田 手 根 火 目 芽 湯 夜 輪〈3類〉、縁 恩 缶 険
恨 芯

三拍名詞アクセント語(節)例

(1)高平型 [●●●・●●●▼] / ○○○ /

欠 伸 筏 錨 田 舎 鯛 飾り 霞 形 鯉 着 物 鎖 轡 車 煙 仔 牛 氷
小 山 衣 魚 舅 印 使 い 机 隣 膠 寝 言 初 め 鼻 血 庇 都 鎧〈1類〉
……、間 桜 翼 扉〈2類〉、黄金 小麦 岬〈3類〉、拳 曆 仏〈4類〉、簾〈5
類〉、背中〈6類〉

(2)頭高型 [●○○・●○○▼] / ○〇〇〇 /

え く ほ 〈2類〉、鮑 栄 螺 力 二十 歳 〈3類〉、嵐 五 つ 瓦 紅葉 蕨 〈4類〉、
朝 日 油 命 蝶 胡 瓜 ざ く ろ 姿 涙 枕 眼 〈5類〉、病 〈7類〉

(3)頭二高型 [●●○・●●○▼] / ○〇〇〇 /

麓 南 〈1類〉、二 つ 二 人 〈2類〉、恨 み 男 思 い 面 女 仇 境 宝 袴
東 光 〈4類〉、心 〈5類〉

(4)尾高上型(低平) [○○●・○○○▼] / 〇〇〇〇 /

額 羊 昔 〈1類〉、夕 べ 〈2類〉、兎 鰻 烏 狐 雀 鼠 裸 〈6類〉

(5)中高型 [○●○・○●○▼] / 〇〇〇〇 /

小 豆 毛 抜 き 釣 瓶 と かけ 緑 百 足 〈2類〉、頭 鼬 鏡 刀 鋏 畑 林
袋 〈4類〉、櫛 柱 〈5類〉、高 さ 狸 〈6類〉、後 ろ 蚕 兜 鯨 葉 便 り 盥
椿 〈7類〉

四拍名詞アクセント語(節)例

(1)高平型 [●●●●・●●●●▼] / ○○○○ /

妹 敢 闘 獣 欠 航 散 髪 丘 陵 鏡 台 洗濯 倒 産 友 達 鶏 横 綱……

(2)頭高型 [●○○○・●○○○▼] / ○〇〇〇〇 /

挨 拶 朝 顔 猪 関 東 官 庁 蝙 蝠 椎 茸 先 生 た ん ぼ ぼ 阪 神 富 士 山 羊 か
ん……

(3)頭二高型 [●●○○・●●○○▼] / ○〇〇〇〇 /

果 物 結 構 粉 雪 花 嫁 山 々……

(4)頭三高型 [●●●○・●●●○▽] /○○○〇〇/

青空 篝火 唐傘 花びら 花婿 止まり木 半年 万歳……

(5)尾高上型 [○○○●・○○○○▽] /〇〇〇〇〇/

一杯 近鉄 拳骨 高校 失敗 新宿 トンカツ 長靴 針金……

(6)中二高型 [○●○○・○●○○▽] /〇〇〇〇〇〇/

色紙 鶯 兄弟 孝行 今晚 将来 近道 食べ物 中指 故郷 湖 紫……

(7)中三高型 [○○●○・○○●○▽] /〇〇〇〇〇〇/

インチキ 金槌 カマキリ 缶切り 竹の子 手袋 鋸 毎日 松茸……

二拍動詞アクセント語(節)例

(1)高平型 [●●] /○○/

行く 売る 押す 貸す 刈る 消す 知る 散る 釣る 鳴る 塗る 乗る 張る
減る 遣る 割る〈1類〉(以上の過去形は [●●○])

産む 追う 置く 聞く 汲む 咲く 敷く 死ぬ 吸う 空く 添う 突く 継ぐ
積む 飛ぶ 泣く 抜く 引く 巻く 揉む 止む 言う [ju:]〈1類〉

(以上の過去形は [●○○])

着る 為る 煮る 寝る〈1類〉(以上の過去形は [●○])

(2)頭高型 [●○] /〇〇/

居る (過去形は [●●○])

(3)尾高上型 [○●] /〇〇〇/

会う [au・ota] 編む 打つ 書く 勝つ 嘔む 切る 食う 漕ぐ 刺す 住む
剃る 立つ 取る 縫う 脱ぐ 練る 飲む 這う 吐く 吹く 降る 乾す 掘る
蒔く 待つ 漏る 読む〈2類〉以上の過去形は [○○●])

来る 出る 見る〈2類〉(以上の過去形は [●○])

三拍動詞アクセント語(節)例

(1)高平型 [●●●] /○○○/

上がる 当たる 送る 飾る 変わる 削る 捜す 探る 握る 巡る 譲る〈1類〉、
余る 析る 移る 起こす 落とす 帰る 崩す 曇る 縛る 詰まる 照らす
濁る 光る 許す〈2類〉(以上の過去形は [●○○○])、

明ける 借りる 枯れる 消える 捨てる 染める 腫れる 負ける 燃える〈1類〉
(以上の過去形は [●○○])。

浮かぶ 歌う 嫌う 沈む 慕う 進む 並ぶ 運ぶ〈1類〉、

祝う 動く 恨む 選ぶ 思う 乾く 砕く 叩く 頼む 違ふ 包む 懐く 悩

む 習う 憎む 僻む 〈2類〉(以上の過去形は [●●○○])

(2)尾高型 [○○●] / ㄱ○○○ /

植える 〈1類〉、生きる 起きる 落ちる 掛ける 覚める 建てる 付ける 溶ける 撫でる 逃げる 晴れる 〈2類〉(以上の過去形は [○○●])

作る 〈2類〉(過去形は [○●●○])、歩く、隠す 〈3類〉(以上の過去形は [○○○○])、

参る 入る 〈3類〉(以上の過去形は [○●●○])

四拍動詞アクセント語(節)例

(1)高平型 [●●●●] / ○○○○ /

嘲る 窺う 疑う 悲しむ 従う 養う 〈1類〉(以上の過去形は [●●●○○])、
与える 重ねる 並べる 始める 〈1類〉、集める 数える 調べる 助ける 流れる 離れる 〈2類〉(以上の過去形は [●●○○])

(2)尾高型 [○○○●] / ㄱ○○○○ /

隠れる 〈2類〉(過去形は [○●○○])

二拍形容詞アクセント語(節)例

尾高型 [○●] / ㄱ○○ /

良い 無い (以上の過去形は [●●●●])

三拍形容詞アクセント語(節)例

頭高型 [●○○] / ○ㄱ○○ /

赤い 浅い 厚い 甘い 荒い 薄い 遅い 重い 堅い 軽い 暗い 遠い 〈1類〉、
熱い 多い 黒い 白い 高い 近い 強い 長い 早い 低い 深い 古い 弱い 〈2類〉(以上の「～なる」の形は [●●●●])

四拍形容詞アクセント語(節)例

(1)頭二高型 [●●○○] / ○○ㄱ○○ /

悲しい 尊い 空しい 〈1類〉、詳しい 親しい 涼しい 正しい 等しい 〈2類〉
(以上の「～なる」の形は [●●●●●])

(2)中三高型 [○○●○] / ㄱ○○○ㄱ○ /

おいしい

(「～なる」の形は [○○○○●])

参考文献

- 和田実（1959）「兵庫県高砂市伊保町－旧印南郡伊保町－」（『国立国語研究所報告16 日本方言の記述的研究』）明治書院
- 榎垣実編（1962）『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 山口幸洋（1968）「兵庫県の垂井式アクセントについて」（『音声学会会報122』）
- 徳川宗賢（1980）『論集日本語研究2 アクセント』有精堂
- 中本正智（1981）『日本語の原景－日本列島の言語学－』金鶏社
- 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編（1982）『講座方言学7 近畿地方の方言』国書刊行会
- 兵庫県教育委員会編（1989）『兵庫県民俗調査報告12 兵庫県の方言－兵庫県方言収集緊急報告書』
- 中條修（1989）『日本語の音韻とアクセント』勁草書房
- 平山輝男（1960）『全国アクセント辞典』東京堂出版
- （はしお なおかず・東京都立大学大学院学生）